

このフォーラムはさしあたり英語圏を念頭において、近世という時代、16世紀から18世紀前半まで（中心は17世紀）における「経済認識」と「啓蒙」のモーメントの関連について掘り下げてみようという試みである。啓蒙とは人間の知的覚醒を積極的に推し進めることを肯定し、それにコミットする思想であるが、通常18世紀ヨーロッパに求められてきた。けれども、啓蒙の起源はルネサンス・ヒューマニズムに遡るであろう（Holmes, George, *The Florentine Enlightenment*, 1400-1450, OUP, 1969.）啓蒙が上のように定義できるとしても、啓蒙の現れ、プロジェクトは多様かつ多面的であった。そのなかで何が経済認識と不可分の関係にあったのかと問いかけながら、古典経済学の成立以前の、従来の用語で、重商主義と称された時代（原始蓄積期）の経済認識の特徴を再検討しようというのである。

アプローチは、個別的な思想家の分析、多面的なコンテキスト分析をとる。そしてそのあと、総合的な視野に立ってみて、何が言えるかを考えてみたい。もちろん、古典派経済学の形成は問題として意識しており、最終的に、経済学はいかなる文脈で成立したのかという問題にフォーラムとしての回答を与えたい（篠原）と考えている。

ルネサンスの人文主義は古典的思想を復活し、スコラ的キリスト教に対立した。マキャヴェッリの共和主義はヴィルトゥの概念によって社会変革力となる。パドヴァから始まった科学革命もまたフマニタスに自信を与えた。しかし人文主義者として出発した宗教改革者は世俗的価値を否定し、近世の価値の相克を激化させた。社会は根源的な分裂と内乱に引き裂かれた。危機の世紀17世紀は根源的な問題を考え抜くには格好だったかもしれない。こうして17世紀は天才の世紀でもあった。経済の価値は次第に否定しがたい力を帯びようになるが、17世紀には経済認識は未だ自律の端緒にあった。

大航海時代の情報革命は、火薬・羅針盤・印刷術が可能にしたが、ヨーロッパ人の視野を広げるとともに物欲と支配欲に火をつけた。こうした経験は啓蒙思想家によって、社会分析に適用され、社会思想を生み出す。新しい経験は新しい言語によって明確な思想となる。言葉は思想と啓蒙の最大の武器である。印刷術の発明は言語と思想の独占を不可能にした。しかし、この発明が予想する民主化は、国内的には内乱に導き、対外的にはヨーロッパの蛮行に媒介されて、帝国の支配、列強の角逐をもたらした。航海者は、キリスト者でもあったが、冒険商人、海賊、アウトローでもあった。こうして原住民の虐殺が起こる。

平和で安全な生活はいかにして可能か。マナーの馴化はいかにして可能か。内乱の克服はいかにして可能か。帝国支配はいかにして廃止しうるのか。人はどうすればよくいけることができるのか。人権、富と徳の思想が直面したのは、こうした問題である。こうした問題に多かれ少なかれコミットしつつ、初期啓蒙時代の経済論者は、どのような経済分析を遂行したか。ペティの経済科学（大倉）、修辞学伝統と政治算術（伊藤）、ロックからハチスンへの展開（生越）、ヒュームの経済認識（壽里）を新しい側面からの接近も加味しつつ回顧し、深化し（渡辺、森、全体討論）今後の可能性のある研究方向を明確にしたい。